長野・榎田（えのきだ）遺跡

1 所在地　長野市若穂綿内

2 調査期間　一九八九年（平1）四月～一九九二年一二月

3 発掘機関　㈶長野県埋蔵文化財センター

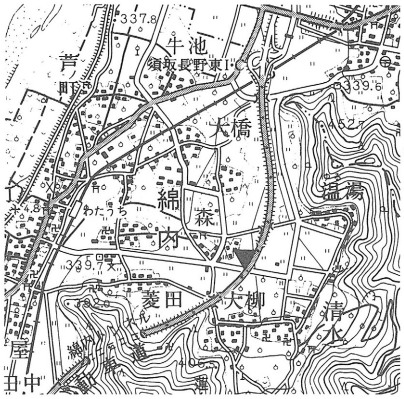
4 調査担当者　伴　信夫・野村一寿ほか

5 遺跡の種類　集落跡・自然流路跡

6 遺跡の年代　弥生時代中期～後期、古墳時代前期～後期、奈良時代、平安時代、中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は長野市の北東、千曲川と犀川が合流する地点に近接した中洲状の微高地に位置する。榎田遺跡では古墳時代中期～後期に集落が継続して営まれるものの、七世紀末～八世紀初頭には集落が一時期断絶する。八世紀中葉以降に再び数棟の住居が登場し、九世紀中葉～後葉に約三〇棟の住居と数条の溝が確認された。しかし、一〇世紀以降の遺構は殆ど検出されておらず、集落が断絶した可能性がある。



木簡(1)が出土した溝SD三三は、遺跡南部に位置する。幅一二m深さ四〇cmを測り、南東～北西方向に三〇m程検出した。木簡は一層から、九世紀中葉～後葉を主体とする土器とともに出土している（一〇世紀代の緑釉陶器も数片出土）。同溝では、他に木製の糸巻き、曲物なども見られる。また近接する溝跡SD四七では「乙貞」と組み合わせ文字で書かれた墨書土器一〇〇点以上や、緑釉陶器、皇朝十二銭の一つ饒益神宝一点などが出土した。

土器の墨書「乙貞」

榎田遺跡では、南部の溝跡群において右のような特殊な遺物の出土が目立つのに対し、そこから約五〇〇m離れた北部の住居跡群では、墨書土器や緑釉陶器が殆ど出土しないのが特徴である。

木簡(2)が出土したSG三は、遺跡中央部に位置する。自然流路と推定され、幅約三〇m深さ約三mを測り、南西～北東方向に五〇m程検出した。SG三では四層以下で古墳時代の遺物が大量に出土した。しかし木簡は三層より出土しており、共伴遺物も殆ど見られないため、帰属時期を推測することは難しい。

8　木簡の釈文・内容

ＳＤ三三

(1)　十七□〔日カ〕百九十三束　十八日百□□　十九日百□〔三カ〕束　廿日百七□
□□　□廿一□〔百カ〕□〔束カ〕三□□□□□　□□卅□□□〔卅〕七□〔束カ〕
□□六百十二束十日百六十四束十一日百廿四束十二日廿□〔廿カ〕〔九カ〕
□百八十八□〔束カ〕　十七日百六十九束十八□〔日百廿カ〕□三束　西室□□〔内カ〕

246×(58)×5　081

ＳＧ三

(2)　・「□〔甕カ〕甕　甕　甕　」
・「□□□□」

243×20×4　051

(1)は全体に材の劣化が著しい。両側面は劣化が激しく、本来の左右両側面が残存しない可能性が高い。上端は平面もしくは側面削り、下端は切りの可能性が高い。上下とも端部に文字がかかったり近接していることから、文字の記録後に上下ともに切断された可能性が高く、本来は上下の欠損部にも文字が記されていたと推定される。

本木簡には束数が日次に記されており、収穫（収納）を一日ごとに記した「日記」の木簡である可能性が考えられる。しかし何の束数を数えたのかは不明である。判読できる部分から推測すると、最低二ヵ月にわたる記録と考えられ、各日とも百束以上の束数が記されている。また四行目にやや大きめの字で書かれている「西室」は収納場所を指す語の可能性がある。

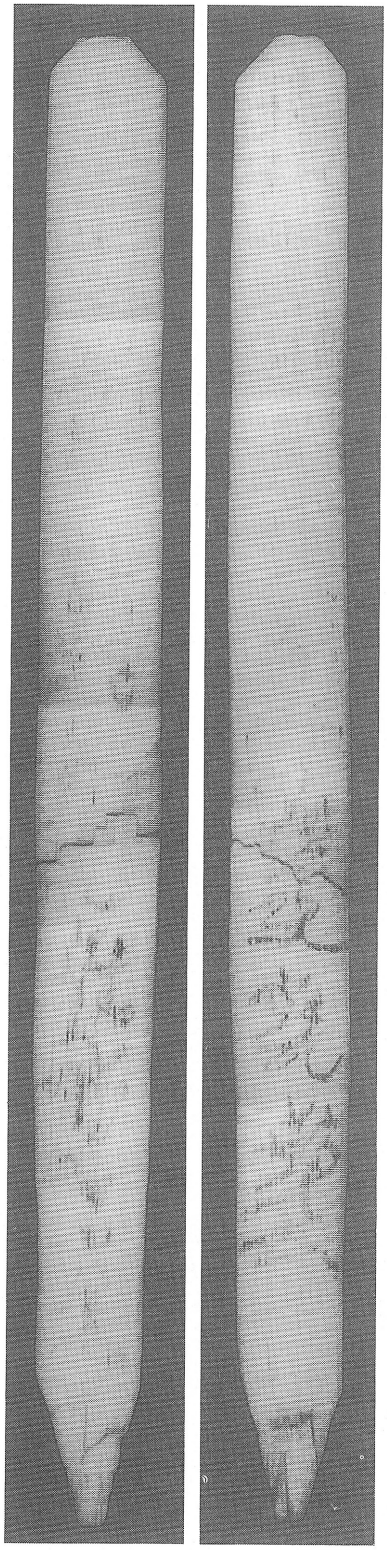
(2)は、上端は台形状に成形し、角稜を平面もしくは側面削りにより調整。下端は剣先形に近い縦長の台形状に成形し、側面削りにより調整。上下両端面は無調整。表裏剝ぎ取り。中央部の割れは自然の欠損。材を成形し、調整をした後に墨書したものと考えられる。

9　関係文献

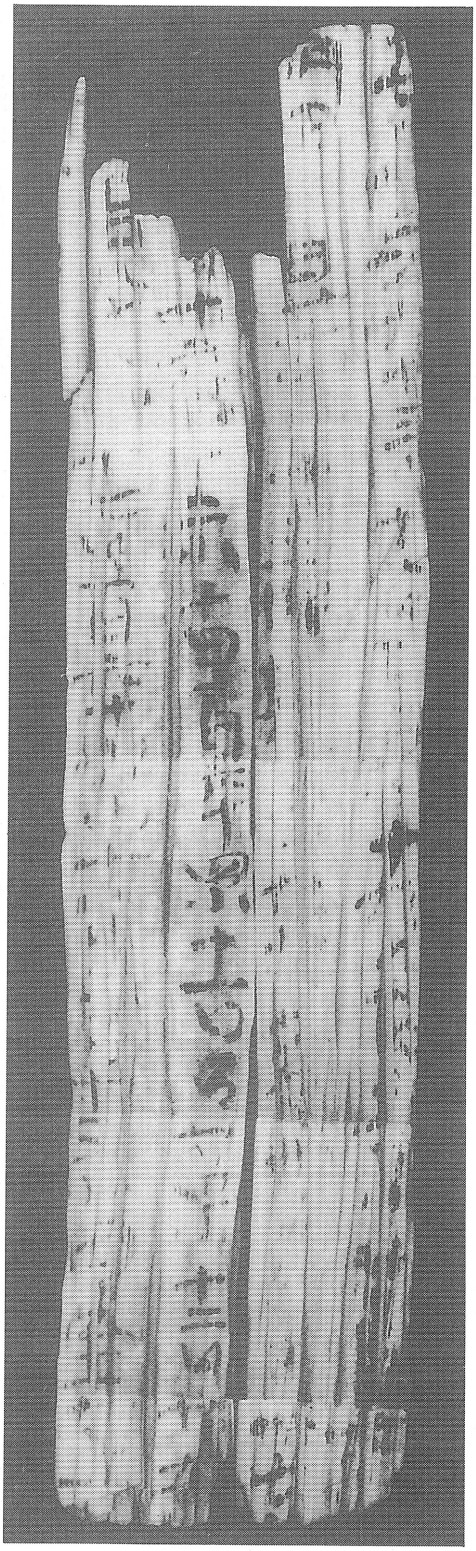
長野県埋蔵文化財センター『榎田遺跡』（一九九九年）（広田和穂）

(1)

1998年出土の木簡



(2)



(1)